

グリーンサークル 17号

グリーンサークルは、多摩市の「水とみどり」に深く関わりのある方々や環境活動、情報をご紹介します。皆さまの自然に対する関心が、明日のみどりに繋がります。この紙面が多摩のみどりについて考えるきっかけとなれば幸いです。

クローズアップ

多摩市グリーンボランティア連絡会 代表 川添 修



センリョウ



「多摩グリーンボランティア森木会」の活動が始まって、14年目を迎えています。また、平成23年4月から開始した「多摩市グリーンボランティア連絡会」の活動は、3年8ヶ月が過ぎました。これらの活動を続けて来ることができたのは、グリーンボランティア活動に参

加いただいている皆様のご協力があればこそだと思っております。心より感謝申し上げます。

私は、1977年から多摩ニュータウン建設の公園緑地業務などに携わらせていただきました。また、1999年から2001年までの8年間には、多摩市のみどりの審議委員を務めさせていただき、多摩市のみどりの現状を良く知る機会を得ました。

多摩ニュータウンの公園緑地事業では、「昔ながらの緑を保全し、造成により失われた緑をよみがえらせ、新しい緑を育てる」ことを基本としていました。

1971年に、諏訪・永山地区で第一次入居が始まり、これに合わせて地区公園1箇所、近隣公園4箇所、児童公園（現在は、街区公園と称しています。）14箇所が、段階的に整備されました。1974年には、公園緑地や歩行者専用道路だけでなく、のり面や住宅地内の緑も含めて一体的に計



活動前の緑地の状況

画することの重要性から、緑のオープンスペースを開発面積の30%以上確保するという方針が採択されました。

1977年頃は、主に「アメニティー

(amenity:快適性・快適な環境)」という言葉を抛り所に公園緑地の計画設計作業をしていました。このように、公園緑地が整備され共用が始まってすでに40年以上経っています。

「多摩グリーンボランティア森木会」の活動が始まった2001年当時、すでに公園緑地の整備から30年を経ており、多摩市の財政逼迫の影響などを受けなかなか緑地の樹林管理には手が回らない状況でした。

当時、審議会の委員をしていた3人が話し合い、なんとか里山の原風景を取り戻すためには、自分たちが行動する必要があるとの思いに至り、活動を一緒にしてもらえる仲間づくりからはじめることとしました。仲間づくりにあつ



活動を始めた頃の状況

ては、少しでも緑地管理の知識を得てもらいたいとの思いから多摩市と協働して「多摩市グリーンボランティア講座」を始めました。

現在、多摩市内10箇所の公園緑地の雑木林で、約190名近い方が毎月2回の活動を行っていらっしゃいます。おかげさまで、雑木林の植生環境が良くなり、キンラン、ギンラン、ジュウニヒトエ、ナンバンギセルなど多様な植物が見られるようになってきました。また、活動当初お逃げていた鳥も今は活動していても逃げなくなっています。

これら豊かな緑環境を、次の世代に引き継ぐために、今後ともご協力くださいますようお願い致します。また、安全で楽しいグリーンボランティア活動を通じて、素晴らしい仲間作りができることを願っております。

～活動団体を訪ねて～ なな山緑地で活動すること

なな山緑地の会 副会長 相田 幸一

なな山緑地とはこんなところ

多摩市の最も北の部分。2.5ヘクタール強の広さで、南西へと延びる斜面地の北端だ。古くからの雑木林は多摩市にはほとんど無いが、このような斜面地や市境近くにはわずかに残っている。府中市に住む元の山主さんが遺産相続をきっかけに昔ながらの保全を望んで多摩市に約1ヘクタール寄付された。その後、隣接の雑木林を二区画多摩市が買い足して現在の広さとなっている。

緑地を西の山、中の山、東の山と分けて呼んでいるが、その特徴をはっきりとすることができる。

西の山は落葉広葉樹の林だ。コナラが大勢を占めヤマザクラ・クヌギ・シデの仲間、ケヤキ・マルバオダモが競って高木となり、林床はキンラン・ギンラン・エビネ・サイハイラン・ヤマユリ等が四季を彩る。中の山は常緑広葉樹のヒサカキ・イヌツゲ・シラカシが優先して林床には草花は少ない。東の山は高木として落葉広葉樹が優先しているが、林床はアズマネザサ(シノダケ)に覆われ、太さ2cm、高さ5mに及ぶものもある。野生動物のタヌキとアナグマに同居させてもらっている。

雑木林の楽しみ方

作業の道づくりから始まり、枯損木・倒木の片づけ、スギ・ヒノキの間伐・枝打ち、林床の草刈、落葉掃き、ヤマザクラ・コナラの不整形木、混在木の伐採、シイタケ・ナメコの菌打等が毎年の作業サイクルとなっている。発生材はすべて緑地内で処理しており、材料としての活用に心掛けている。たとえば、バス通り歩道側の柵。崩れかかる崖地の土留め。作業の道の側木。階段の土留めと杭。休憩用テーブル・椅子・ベンチ。樹木名板。落葉囲いと堆肥づくり。キノコのホダギ。木工材(おもちゃ・道具・小物調理具)、めかい材。薪。

樹木の苗づくり。等々あらゆる可能性を追求している。

四季それぞれの表情

〈春〉まさに「山笑う」だ。樹木の芽吹きとヤマザクラの花、日ごとに色合いを変えてゆき深まるみどり。林床に年々数を増す「スプリング・エフェメラル」。

〈夏〉「山滴る」。濃い緑と木立を抜けるそよ風は緑陰の楽園を作っている。昨今、蚊とハチに少々悩まされている。

〈秋〉「山装う」。赤、青、紫、オレンジ、ピンク、茶、白と草木の実と花がなな山を飾る。

〈冬〉「山眠る」木立は葉を落としひと時の眠りに入る。林床は赤茶に染まる落葉のじゅうたんか掛け布団か。常緑の緑も鮮やかさを捨てて休みに入っている。

こんな林に散策できるささやかな道が程よく配置されている。

これからのなな山緑地

今後のなな山緑地を考えたとき、まずは若返りの時期を何時頃にするか、どのようにするかは大切なことだ。そして、今取り掛かり始めた「めかいづくり」をより本格化すること、アズマネザサの育成の最適な方法を見つけ出すこと。これは第二に考えねばならない。雑木林木工をより盛んにすることも考えていきたい。

「なな山緑地」は、人と緑と生き物の息吹をより高めて、次の世代に引き継いでいくことこそが、私たちに求められている役割なのだと考えている。

〈なな山緑地〉東京都多摩市和田 1336-1

その他、活動等の詳しい内容につきましては下記ホームページをご覧ください

<http://www.geocities.jp/nanayamaryokuchi/>



なな山の四季



活動の様子(ホダギを運ぶ)

～活動団体を訪ねて～

養蜂活動を通じて

多摩ミツバチプロジェクト 峰岸 久雄

都市には自然はないといわれて久しいが、都市の中にも多くの生き物が暮しています。鳥や昆虫のように空を飛べる生き物達にとって暮らしの境界はあいまいです。もちろん自然環境の豊かなほど暮している生き物の種類と数は多くなります。

テレビや新聞、雑誌など話題になっている「銀座ミツバチプロジェクト」をご存知の方も多と思います。大都市銀座の屋上で素人がはじめた養蜂です。銀座生まれで銀座育ちのミツバチが集めた蜜は、ハニーカステラやマドレーヌなどに使われ、銀座の新しい名物として地産地消されています。

その銀座ミツバチプロジェクトから6年前の初夏の晩、銀座の街路樹ミツバチがまちの活性化に役立っているのを、分蜂していたニホンミツバチが多摩美術大学美術館の屋上に届いたのが多摩ミツバチプロジェクトのスタートです。残念ながらそのニホンミツバチは越冬に失敗消滅してしまいました。

その年の春から新たに西洋ミツバチを3群購入し本格的な養蜂が始まりました。秋までに100kg近いハチミツが採れました。採れたハチミツを活用したスイーツコンテストや会員のレストランでのデザートやロールケーキに使われ、少しだけまちの活性化のお役に立つことが出来ました。

グリナード永山に多摩市と長野県富士見町の食産物を扱うアンテナショップ「ポンテ」ができると同時に、多摩市の地域農産物として多摩ミツバチプロジェクトのハチミツが販売されるようになりました。新鮮な天然ハチミツはとても美味しく人気商品のひとつで、すぐに売り切れてしまいました。

ミツバチは自然界では女王蜂だけが越冬、働き蜂や雄蜂は死んでしまいます。養蜂は群として春まで元気に越冬させることが重要な仕事になります。今年は無事越冬できそうですが、油断は禁物です。

春一番のサクラのハチミツが楽しみです。

われわれの暮らす多摩ニュータウンは、開発により創造された緑の多い美しい街です。その緑を活かし緑の質を高めるために役に立っている小



蜜板の様子をみる

さな昆虫がミツバチです。ミツバチに夢を託して活動しているのが「多摩ミツバチプロジェクト」です。ミツバチの行う採蜜行動が、植物の開花結実を促し、活力を生み出すことに貢献しています。

また、ミツバチは指標昆虫としてわれわれの環境の安全、安心を知らせてくれるバロメーターの役をしてくれる大事な昆虫でもあります。ミツバチは僅かな農薬にも負けてしまう自然の生き物です。ミツバチが元気に飛び回っている環境は、農薬などの汚染のない安全な環境といえます。多摩ミツバチプロジェクトのミツバチが暮らす多摩センターはその視点から見れば安全な街といえます。

現在、多摩美術大学美術館の屋上には今年の春に埼玉の知人の養蜂家から来た群、そこから分蜂した群、沖縄から来た女王蜂を受け入れた群、初秋に知人から来た女王蜂の群と出生の違う個性ある4群のミツバチが元気に暮らしています。

そして暖かい春が巡り、可愛いミツバチたちが集めてくれた美味しいハチミツを皆様にも届けるように仲間と一緒に楽しく頑張りたいと思いますので、応援してください。

会員を募集しています。

連絡先

多摩ミツバチプロジェクト事務局 峰岸久雄
minegishi@ja3.so-net.ne.jp もしくは
080-6783-7072 に連絡を！



ナイフで蜜蓋をカット



蜜板を分離機に入れる

多摩市 みどりのかわら版

多摩市公園緑地課 小林 功

多摩市グリーンボランティア通信・グリーンサークル17号に記事掲載の機会をいただき有難うございます。折角のチャンスなので、刊行される時にも少し湯気が残っているようなホットで喜ばしい情報をお伝えします。

去る11月14日、多摩市の東部と稲城市との市境に位置する連光寺六丁目と稲城市若葉台四丁目にまたがる約3.3ha(多摩市1.6ha、稲城市1.7ha)の地域が「東京における自然の保護と回復に関する条例」に基づく『連光寺・若葉台里山保全地域』に指定されました。また同時に、多摩市側に含まれる湿地エリア2,700㎡を『野生動物植物保護地区』に指定し、更なる保全が図られることとなりました。

そもそもこの地域は、多摩ニュータウン開発の区域から外れ、樹林地や耕作地、休耕地の湿地など多様な環境が組み合わさった里山景観が残る自然環境に大変恵まれたところです。その場所に平成19年9月、突如として開発計画が勃発したことに端を発し、開発させるか保全するか、あるいは一部でも保全できないかなど、さまざまな意見や要望が錯綜していました。

こうしたなか、地元住民の皆さんはもとより「連光寺ほたる連絡会」はじめ、このグリーンサークルにも係わる多くの自然を愛する皆さんの熱意が3千人を超える署名となり、平成24年4月に多摩市長あてに提出されました。

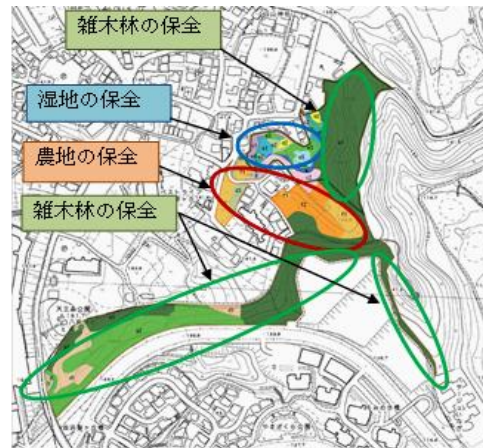
このような後押しも受け、平成24年10月東京都がおこなった湿地調査の結果、ヘイケボタルやホトケドジョウ等に加え「キバサナギガイ」や「ミズコハクガイ」等の絶滅危惧種である陸産、淡水産の貝類も生息している非常に希少な湿地環境であることが判明し、このたびの保全地域並びに保護地区の指定が実現しました。

開発計画の勃発から保全・保護の指定に至るまで、足掛け7年が経過しましたが、これはまさに市民力の成果であり大変喜ばしい出来事であると同時に、この環境を次世代の多摩市民に引き継ぐべく、維持・保全・利活用への第一歩に過ぎないものと考えています。

引き続き、地域の皆さんはじめ自然環境を愛する皆さんとの協働の取組みにご理解とご協力をお願いいたします。



指定範囲の上空写真



現存植生と保全方針説明図

表紙の絵

「センリョウ」(センリョウ科)

千両という文字からおめでたい縁起物として、お正月のお飾りや生け花によく使われています。

絵・内城 葉子

<プロフィール>1949年東京生まれ。
1986年国立科学博物館第2回植物画コンクール文部大臣奨励賞、1989年世界らん展ボタニカルアート部門ブルーリボン賞、英国王立園芸協会ロンドン・フラワーショーGold Medal受賞など
<所属>日本ボタニカルアート協会、日本植物画倶楽部、どんぐり山を守る会代表
<著書>「鏡の中-俳句と植物画」共著、2005年新風舎。他、絵本や学習図鑑などに描画。

雑木林などの活動を通じ、実際の木々や草花に触れることが細部に及ぶ精密な描写となり、植物本来の温もりを感じられる作品が特徴です。

編集後記

ミネラル分が多いハチミツは古代人にとっては貴重な栄養資源や、薬効を期待する食品とされていました。多摩ミツバチプロジェクトのハチミツは淡い色がとても綺麗です。花の良い香りと優しい甘味が口に広がり、おもわず目を細めてしまいます。「良薬口に甘し」です。

ハチが一生涯かけて集める量はスプーンひと匙相当なのだそうです。スプーンにのったハチミツの向こう側に見えるものを想像しながら美味しくいただきました。(高澤 愛)

多摩市グリーンボランティア通信 グリーンサークル17号
発行日:2014年12月19日
編集:多摩市グリーンボランティア連絡会 事務局
発行責任:多摩市グリーンボランティア連絡会 事務局
〒206-0033 東京都多摩市落合2-35 多摩中央公園
多摩市立グリーンライブセンター内
電話 042-375-8716 FAX 042-375-0087
ホームページ <http://www.keisen.ac.jp/tglc/>